

モーム「月と六ペンス」

橋本ゼミ 三年 井上敦司

金曜ロードショーの洋画を一家で鑑賞していたところ、唐突に濡れ場が放送されて茶の間が気まづくなり、そのまま焦るようにチャンネルを変えられる。皆さんはこのような経験をされたことがあるのではないだろうか。僕はない。我が家の場合、親が子どもの意思を尊重し、僕も妹もチャンネルを変えない選択をすることが多かったからである。

世間一般においては、愛は美化される。ゴールデンタイムに放送されるドラマの多くは恋愛を主題にしたものであるか、恋愛要素を含むものであろう。一方肉欲は、表向きは美化されず、汚らわしきものとして扱われる。性欲を主題にしたドラマや、性行為を含む描写のあるドラマは深夜に追いやられるだろう。

月と六ペンスにおいて、ストリックランドは「肉欲ならわかる。それは正常で、健康的だ。対して、愛は病気だ。」(p265)と発言しているが、これは現代社会で言われていることと真逆である。ストリックランドの発言は現代人の価値観では受け入れられないものも多いだろうが、「肉欲は正常で健康的」に関して一考の余地はあるように思われる。

現代社会においては、性や、それを思わせる描写などをタブー視し、排除するかあるいは人目につきにくいところに押し込めておこうとするような動きがあるように思われる。そもそもにおいて性はなぜタブー視されるのだろうか。三大欲求とよく言われるが、食も睡眠も（度を越さない限りにおいてではあるが）それ自体はタブーとされないのに対し、性はそれ自体が既にタブー視されているように思われる。

日本において性がタブー視される傾向が強まったのは、明治以降に西欧的な価値観を導入してからである。西欧の価値観の中心には常にキリスト教が存在するが、キリスト教における性に関する象徴的な話としては聖母マリアの処女懐胎の寓話が存在する。浅学故、聖母マリアの処女懐胎の背景はわからないが、少なくともキリスト教的思想においては性行為それ自体が一種禁忌となっているように感じられる。現にキリスト教では、快樂のための性行為を禁忌とし、子孫を残すための性行為は辛うじて認められている。

だが、そんなことを言っても、宗教のように我々の脳裏に植えつけられた性に関わるタブーを取り払うことは容易でないし、性表現を嫌悪する人もいるだろう。実際、私も大学生になるまでの18年間は大人に与えられる価値観の奴隷であったため、その価値観から逃れ得なかった。恐らく死ぬか発狂するまで無理であろう。僕が性の禁忌に関して考えたのは、自由の規制の端緒となりやすいエログロナンセンスの表現規制の中で、昨今の日本政府は性に関する表現の規制を推進しているからである。何故性に関する規制はすんなり受け入れられるのか考えているうちに、この小学生並の疑問に行き当たったわけだが、今の僕には答えを出すことができなかった。しかし、この先入観を捨てて性のタブーを考え直すことが、性に関する向き合い方を考える良い機会にはなるだろう。(1222字)

和辻哲郎「風土」

橋本ゼミ三年 井上敦司

以前何かの本で読んだことだが、外国に行くということは、行った先の国の見方のみならず自国に対する見方をも変える契機になる。私は高校時代に一度だけイギリスに行ったことがあるが、殆ど観光気分で、日本を理解する契機にすることはできなかった。イギリスで最も印象に残っていることといえば、日本的な山が無かったことぐらいである。今にして思えば後悔の残ることであるが、当時の自分の知見では致し方ないことであったと思う他ない。次は同じ失敗を繰り返さないように、見聞を広めたいと感じている。

本著は、和辻哲郎が海外を旅した経験から、日本人を分析した書である。私が本著において最も興味深く思ったことは、日本とヨーロッパの政治の差異についてである。

ヨーロッパは都市が城壁で囲まれており、その中で、外敵から共同で身を守る必要があった歴史から、各個人が公共の空間に責任を持つと同時に、自己主張をもち、またそれを尊重するシステムが確立されている。その伝統が受け継がれているため、現代でも、政治に対しての責任と意思表示がはっきりとしている。日本にも城はあるが、城壁の中に街があるわけではなく、城の中は武士の領域であり、多くの市民は城の外で暮らしたという違いがある。

一方日本においては、近世以前からの、家のシステムが変化しないまま、形だけヨーロッパの政治システムを導入した。前述のとおり、近代ヨーロッパの政治システムは、城壁内の街における政治のシステムの延長線上に存在するものである。日本は、公共的なものは家の外という価値の残っているため、ヨーロッパ流の政治システムは有効であるとは言えない部分がある。公共的なものが家の外ということは、自分と無関係あるいは自分の管理外ということになるため、結果として政治に対して責任を感じず、自己主張も弱くなりがちである。その代わり、日本人は、家という自分の管理下にあるものに関しては責任感が強くなっている。

以上のように、外国で上手くいっている制度であっても、風土の違いからそれが日本でも上手くいくかどうかは定かではないということが伺える。ヨーロッパで成功している制度ならまだいいのだが、ヨーロッパでも失敗しているような制度を、先進国としての体面を保つためか導入しようとすることもよく見られる。これは明治維新から続き、終戦によって強化された、日本の欧米コンプレックスの表れかもしれないが、これも情けない姿だと感じてしまう。

また、日本人は政治に無関心であるなどとはよく言われるが、今の政治形態はそもそも日本人に合わないものなのかもしれない。しかし、政治に興味がないのは老人よりは若者であるのだが、現代の若者は今の老人よりはヨーロッパに近い環境で生活しているはずであり、それを考えると矛盾も感じる。そのことを念頭に置いて、どのような政治形態が日

本では良いのかを考えてみることも必要なのではないかと感じた。(1200字)

ゲーテ「若きウェルテルの悩み」

橋本ゼミ三年 井上敦司

日本には有害図書という言葉があり、街中にも有害図書を入れるためのポストが街中にも存在する。見たことがある方もいるのではないだろうか。こういうことが何故起きるのかというと、それが子どもに悪影響を与えると判断し、それを子どもから遠ざけんとするからであろう。「若きウェルテルの悩み」も、当時のドイツにおいて、自殺ブームを巻き起こしたと言われる本である。つまり、人に悪影響を与える可能性のある本であると言えよう。日本的に言えば有害図書である。

本に限らず、有害とされる創作物は多々ある。エログロナンセンスを扱う物は特に有害とされることが多い。何故エログロナンセンスは有害と看做されるのか。なるほどエログロナンセンスは犯罪との関係性が見出せるし、その創作物を消費することで、自分も実際に犯罪をしたくなるに違いないという言い分には、若干の説得力を禁じえないし、その可能性は間違いなく0ではない。しかしながら、アダルトコンテンツと性犯罪の因果関係を否定する研究などもあり、創作物のせいで犯罪を起こすということが果たして正しいのかどうかには疑問符がつく。

そもそもにおいて、芸術や文学といった創作の領域は、実際に社会でやることの出すことのできない自身の内面を表現する場という側面がある。そのため、創作物にエログロナンセンスの要素を含む物が現れることは必定である。そのため創作の過程で、创作者の内面の欲求を発散させる効果があると考えられる。また、創作物の受容者は、創作物を消費することにより、同様に欲求を発散させることも可能であろう。

僕は創作物と犯罪や自殺などの間にネガティブな関係が全くないとは言わないが、それ以上にポジティブな影響があると思っている。創作物の有害性を主張する人たちは、まずこの点を考えず、目に見えることだけを考えているように思われる。このような人たちの究極の目標は、ゼロリスク社会なのではないかと推測されるが、僕はその行き着く先はディストピアであると思う。

また、創作物の有害性に対する指摘は、単に自分が好悪の感情に基づいて、自分の好ましく思わないものを排除することを目的とすることも多いように思われる。僕も人間である以上、好き嫌いは存在するし、自分の嫌いな物に対する批判までは自由に行っていと思う。しかし、自分の嫌いなものの存在自体を否定し、有害と銘打って社会から追放しようとすることは、一線を越えた不寛容さである。僕はこのような不寛容の蔓延の先にあるのは、やはりディストピアであると考える。

そもそもにおいて、創作物に触れた人が罪や自殺に走ったとして、創作物が悪いという

よりも、創作物を消費した側に責任があると思うのが当然のことだと思う。パンを食べている人が犯罪を犯したからパンが悪いなどという人はいないだろう。だが、人間は説明のつかない事柄を嫌う。そのためわかりやすく槍玉に挙げられるものとして、創作物に責任転嫁したいだけなのではないだろうか。

僕は、両親が子どもに自由にさせてくれたことが原因か、はたまた規則の厳しい学校で中高を過ごした反動からか、自由に生きたいという考えを強く持っている。そのため、社会のディストピア化は最も望ましからざる事態である。僕は自分が自由に生きる上では、他者の自由も最大限尊重しなければならないと感じているので、僕は極力自由を擁護するし、それに創作、表現の自由も当然含まれる。今後も規制の動きはあるだろうが、引き続き追いかけていきたいトピックだ。(1440字)